

厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）

認知症の人やその家族の視点を重視した認知症高齢者にやさしい薬物療法のための研究

分担研究報告書

もの忘れ外来初診患者の多剤服用の特徴

研究分担者 神崎恒一 杏林大学医学部高齢医学教授

研究要旨：杏林大学病院もの忘れセンター初診患者を対象に、服用薬剤数ならびに 10 剤以上服薬している多剤服用者の特徴について調査を行った。調査の対象は杏林大学病院もの忘れセンター初診患者 186 人（男性 62 人、女性 124 人、平均年齢 80.9 歳、平均 MMSE 得点 23.1 点）。平均服薬数は 4.9 ± 3.7 剤（最少 0 剤～最多 19 剤）で、10 剤以上の薬剤服用者は 20 人（10.7%）であった。

10 剤以上の薬剤服用者の疾患と服用薬剤の特徴として、糖尿病治療薬や循環器系薬剤などの生活習慣病治療薬の服用者 20 人、向精神薬（抗うつ薬、睡眠薬を含む）の服用者 12 人、プレドニゾロン他免疫系治療薬の服用者 4 人、パーキンソン病治療薬（下剤と併せて）の服用者 1 人であった。なお抗認知症薬の服用者は 2 人であった。

以上より、10 剤以上の多剤服用者は血管性認知症で生活習慣病治療薬の服用者、うつまたは気分障害で向精神薬の服用者が多く、AD もしくは他の変性性認知症者の割合は低かった。

A. 研究目的

一般に高齢者は多病のため多剤服用なりやすく、認知症患者でも例外ではない。一方で、認知症患者は服薬管理が困難であることが多く、その観点から投薬数は必要以上に多くなるべきではないと考えられる。

本研究では、当院もの忘れ外来初診患者での服用薬剤数の実態について、服用薬剤数ならびに、とりわけ多剤服用状態にあると考えられる 10 剤以上の服用者についてどのような特徴があるかを調査した。

B. 研究方法

杏林大学病院もの忘れセンター初診患者 186 名（男性 62 人、女性 124 人、平均年齢 80.9 歳、平均 MMSE 得点 23.1 点）を対象

に、服用薬剤数を調査し、とりわけ多剤服用状態にあると考えられる 10 剤以上の服用者についてどのような特徴があるかを調査した。

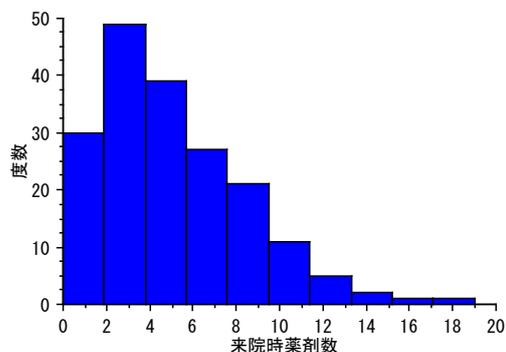
（倫理面への配慮）本研究は「高齢者の虚弱プロセス解明のための総合的調査研究」、および「循環器疾患患者・認知症者におけるポリファーマシーの実態と要因の把握に関する研究」（いずれも杏林大学医学部倫理委員会承認済み）の一貫として行った。

C. 研究結果

対象者の平均 MMSE 得点は 23.1 点で、軽度認知障害（MCI）53 人（52%）、血管性認知症（一部混合型を含む）40 人（21.5%）、うつまたは気分障害 9 人（4.8%）、アルツ

ハイマー病 (AD) もしくは他の変性性認知症 43 人 (23%) であった。

初診時の服用薬剤数の分布をグラフで示す。



186 人の平均服用薬剤数は 4.9 ± 3.7 剤 (最少 0 剤～最多 19 剤) で、0～4 剤の服用者は 97 人 (55%)、5～9 剤の服用者は 70 人 (37%)、10 剤以上の服用者は 20 人 (10.7%) であった。

10 剤以上の服用者の診断名は MCI 9 人 (45%)、血管性認知症 6 人 (30%)、うつまたは気分障害 4 人 (20%)、AD もしくは他の変性性認知症 1 人 (5%) であった。

10 剤以上の多剤服用者における疾患と服用薬剤の特徴として、糖尿病治療薬や循環器系薬剤などの生活習慣病治療薬服用者 20 人、向精神薬 (抗うつ薬、睡眠薬を含む) 服用者 12 人、プレドニゾロン他免疫系治療薬服用者 4 人、パーキンソン病治療薬 (下剤と併せて) 服用者 1 人であった。なお抗認知症薬の服用者は 2 人であった。

D. 考察

当院もの忘れセンター初診患者において、10 剤以上の多剤服用者は全体の 10.7% であった。10 剤以上の多剤服用者の特徴として、糖尿病治療薬や循環器系薬剤などの生活習

慣病治療薬を服用している者の割合が高いのは理解しやすい。中年期からメタボリックシンドロームを背景とする生活習慣病の合併状態は脳心血管イベント発症の予防のため多剤服用になりやすく、その状態のままの忘れ外来を受診したと考えられる。

向精神薬の服用者はうつ病患者に代表されるように睡眠剤や抗不安薬を服用することが多いことが 10 剤以上の服用につながると考えられる。一部には初診時にすでに複数の抗認知症薬、抗 BPSD 薬を服用している者もあった。

プレドニゾロン他免疫系治療薬服用者は合併症に対する治療もしくは予防を目的として制酸剤、経口血糖降下薬、骨粗しょう症治療薬を服用するため多剤服用になりやすい。

なお、初診時に抗認知症薬を服用している者は 2 人であり、AD もしくは他の変性性認知症者は少なかった。むしろ、血管性認知症で生活習慣病治療薬を多種類服用している者、うつまたは気分障害で向精神薬の服用している者が多かった。

E. 結論

10 剤以上の多剤服用者は血管性認知症で生活習慣病治療薬の服用者、うつまたは気分障害で向精神薬の服用者が多く、AD もしくは他の変性性認知症者の割合は低かった。

F. 危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし